

平成15年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 スケトウダラ

学名 *Theragra chalcogramma*

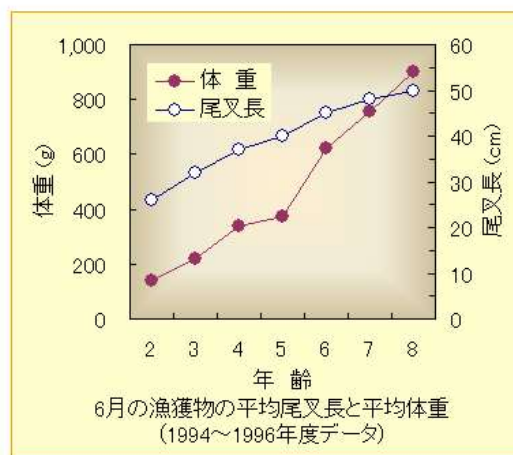
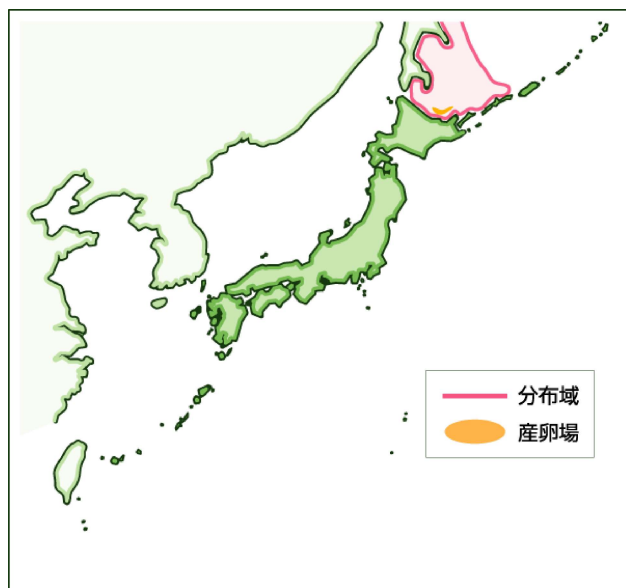
系群名 オホーツク海南部

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特徴

- 寿命： 10歳以上
- 成熟開始年齢： 4歳
- 産卵期・産卵場： 3～5月、北見大和堆～宗谷地方沿岸およびテルペニア（多来加）湾周辺
- 索餌期・索餌場： 初夏～秋季、オホーツク海
- 食性： オキアミ類、カラヌス類、クラゲノミ類、ヨコエビ類をはじめとする小型甲殻類、その他イカ類、魚類など、本海域では周年魚類の割合が高い
- 捕食者： 不明

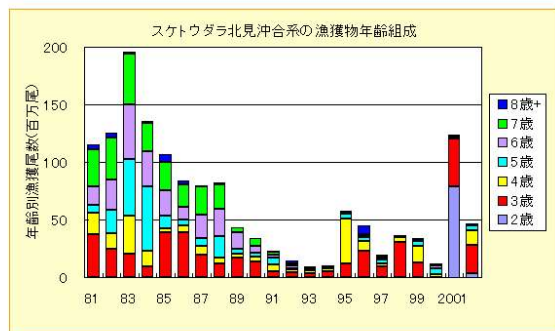
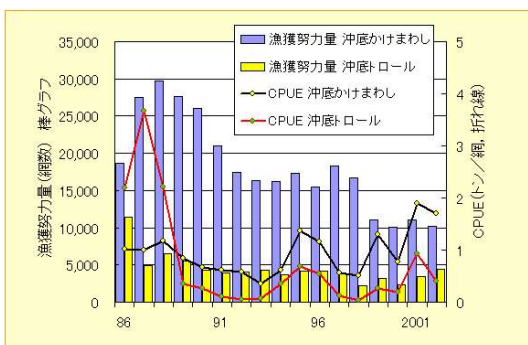
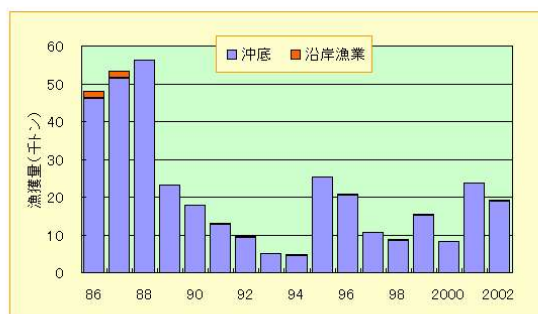


漁業の特徴

本海域で漁獲されるスケトウダラは、ほとんど全てを沖合底びき網（沖底）による漁獲が占めている。漁期は、流氷の接岸期を除くほぼ周年にわたるが、近年では5、6月と12、1月に漁獲量が増加する傾向にある。

漁獲の動向

漁獲量は、1988年度まで5万トン前後であったが、1989年度に23千トンと大きく落ち込み、以後5千～25千トンで推移していた。2001年度の漁獲量は2000年度の約3倍の24千トンとなったが、2002年度には19千トンにまで減少した。この漁獲量の増加は1999年級群の資源豊度が高かったことによると考えられる。漁獲量は漁期年（4月～翌年3月）で集計した。

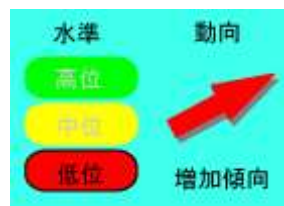


資源評価法

本海域に分布するスケトウダラには複数のグループが存在し、日口の水域を回遊していると推定されている。日本漁船による漁獲量とCPUEの情報があるが、日本水域で得られるこれらの情報が資源全体の状態を代表するものとは判断できない。しかし、利用できる資料が他には無いため、ここでは、日本漁船による漁獲量やCPUE、年齢別漁獲尾数の推移などに基づいて、資源状態を推測した。

資源状態

資源豊度の高い1999年級群が、2001年漁期には漁場へ加入し、漁獲量の増加をもたらしたようである。その結果、これまでオホーツク海では非常に少なかった若齢の2歳魚の漁獲があった。1999年級群に続く年級に、豊度の高い年級群があるという情報はない。日本水域の漁獲量とCPUEは1989年以降非常に低い水準に減少し、その後はその水準からほとんど変化しておらず、資源の水準は低いと判断した。資源の動向は、1999年級群によって増加の傾向にあると考えられるが、後続の年級に豊度の高いものが見られない。加えて、2001、2002年度にかなりの量の1999年級群が2、3歳魚で漁獲されたようなので、2002年度のCPUEの落ち込みから、この増加の傾向は長続きしない可能性が高い。



管理方策

資源状態が低位であるため、資源の回復を管理目標とする。本海域では、1999年級群以降に豊度の高い年級群が加入したという情報はないので、資源を回復させるためには現在の漁獲水準を引き下げ、産卵親魚を確保する必要があると考えられる。なお、ロシアは、オホーツク海（サハリン東岸）の2003年のTACを5千トンと設定して漁獲規制を実施している。

	2004年ABC	管理基準	F 値	漁獲割合
A B C limit	105百トン	0.7Cave5-yr	-	-
A B C target	84百トン	0.8ABClimit	-	-

資源評価のまとめ

- 隣接するロシア水域での漁獲状況が不明で、評価が困難
- 日本水域の状況から、資源は低水準、動向は増加傾向
- 2001、2002年度に資源豊度の高い1999年級群を多量に漁獲
- 1999年級群以降、豊度の高い新規加入の情報はない

資源管理方策のまとめ

- 資源の回復のためには、現在の漁獲水準の引き下げが必要
- 1999年級群の過剰漁獲に対して注意が必要
- ロシア側の漁獲状況の情報収集が必要
- ロシアもTACを設定して漁獲規制を実施している

全国資源評価会議における主な意見及び回答

主な意見

ロシア側のデータが加味されておらず、A B Cには疑問がある。（全国底曳網漁業連合会）

回答

ロシア側の漁獲物に関する情報の収集が必要であり、現在、日ロの科学者交流などを通じて情報の収集に努めており、今後ともさらに努力していきたいと考えています。また、ロシア側もTACによる管理を実施していますが、最近の漁獲は極めて低調であり、ロシア側も資源状況は低位と考えています。

資源評価は毎年更新されます。